

# ほめ返答におけるユーモアについて

## －「フェイス」の概念と会話分析の手法を用いて－

趙文騰(北海道大学大学院生)

### 1. 本稿の目的

ユーモア(humor)に関わる行為として、「冗談」(joke), からかい(tease)や笑いの返答等に焦点を当てた分析がなされてきた。一方で、ユーモアの定義はごく難しい問題であり(Hay, 2001:56), これまでの研究においては、ユーモアとは何であるのかが明確に示されていないことが多い。本稿では、上野(1992), 大津(2007)を参考にし、ユーモアを「真面目に言っているのではなく、相手を笑わせようとする発話にあるおかしさや面白さ」と定義する。

ほめ行動において、冗談めかしたユーモアのあるほめ返答がしばしば観察される。例えば、以下の例 1<sup>1</sup>において、Y は、K はまだ若いから、明るい色の服も着られるというニュアンスを伝え、K に対する間接的なほめを行う(11 行目)。S も 13 行目で Y に同調する。それに対して、K は「パー子になっちゃう」と繰り返す、明るい色の服を着ると、滑稽なことになってしまうというユーモアを示しつつ、そのような服は着られないという言外の意味を表すことで、ほめ返答を行っている(14 行目)。

例 1(CEJC\_T011-007)【明るい服】(省略版)

11 Y: え?まだ着られるんじゃない[の?]

12 K: [>いやいや<.]

13 S: 着[ら:れ:るよ:]

→14 K: [パー子になっちゃう。パー子になっちゃう。]

では、ほめられ側はこのようなユーモアのあるほめ返答を行うことでどのような行為を達成しようとしているのか。本稿では、会話分析の手法を用いてほめ行動を分析することで、ユーモアのあるほめ返答はどのような相互行為上の機能を果たしているのかについて考える。

### 2. 「ほめられ側のジレンマ」

分析にあたっては、「ほめられ側のジレンマ」という概念を援用する。ほめが向けられた後に、ほめられ側がほめを受け入れるか否かという問題に直面することが指摘されている(Pomerantz, 1978; 張, 2014)。ほめを受け入れることはほめ側の見方への同意となるため、ほめ側のよく思われたい、認められたいというポジティブ・フェイス(以下 PF という)(Brown & Levinson, 1987)を満たすことができる(古川, 2007)。一方で、この受け入れはほめられ側の自画自賛にもなってしまう(Pomerantz, 1978)。本稿では、Pomerantz(1978)が提示したこの問題を「ほめられ側のジレンマ」と呼ぶ。

### 3. 事例と分析

本稿では、国立国語研究所が公開している『日本語日常会話コーパス』(以下 CEJC という)を分析データとして用

<sup>1</sup> 例 1 について、3 節で詳細に記述・分析する。

いる。その中からユーモアのあるほめ返答が観察されるほめ連鎖を抽出し、串田(2006)に従いデータの書き起こしを行った<sup>2</sup>。以下に1つの事例を提示する。この事例は1節で掲載された例1であるが、3.1節でより詳細な説明をした上で、ユーモアはどのように実現されているのか(3.2節)、そして、ユーモアのあるほめ返答の産出によってどのような行為が達成されているのか(3.3節)について述べる。

### 3.1 事例の記述

- CEJC\_T011-007 【明るい服】
- 01 Y: あたしもお財布今度ピンクにしようかな:なんて[思ってたよ.  
 02 S: [あ:..  
 03 ほん[と:::?:  
 04 K: [もうさ. やっぱ [小物はね  
 05 Y: [コーラルピンクって[ゆう(0.3) うん(0.3)か:.  
 06 K: [あ:.. あ:. 小物は明るい色はすんのいい[よね =  
 07 Y: [うん.  
 08 K: =だって. 普通の服はなかなか着れな[くねえ?  
 ((Yのほうに視線を向けながら発話している))  
 09 Y: [そ:だね  
 10 (0.3)  
 11 Y: え?まだ着られるんじゃない[の?  
 ((Yは右手を開き手のひらを上に向け、指先をKのほうに向け、視線をKのほうに向けながら発話している))  
 12 K: [>いやいやく.  
 13 S: 着[ら:れ:るよ:.  
 →14 K: [パー子になっちゃう. パー[子になっちゃう.  
 ((Sのほうに視線を向けながら発話している))  
 15 S: [hhhhhhhhh  
 16 Y: [hhhh°パー子°.  
 17 K: [ためだよ. hh°  
 18 Y: [hhhh°パー子°.  
 19 K: だめだよとか[ゆって. °hh  
 20 Y: [あと. なんかちょっとベージュが入ったようなピンクでもいいかな:=  
 21 =とか思ってる.

ママ友同士の3人は喫茶店で雑談している。01行目で、Yは「お財布今度ピンクにしよう」を発することで、三人の間に財布の色という新たな話題が開始される。それに対し、Kは06行目で「小物は明るい色はすんのいいよね」とYの考えに同調した直後、間髪を入れずに続けて「だって」を前置きにし、「普通の服はなかなか着れな」と06行目の根拠になりうる発話を追加する(08行目)。一方、08行目は主語がないデザインになっているため、主語は誰であ

<sup>2</sup> 本稿で以下のトランスクリプト記号を用いる。

文字::	直前の音が伸びている	(数字)	沈黙の秒数
文字.	下降調の抑揚	?	上昇調の抑揚
[	オーバーラップの開始位置	]	オーバーラップの終了位置
文字-	直前の発話が中断されている	(( ))	分析者による注記
→	分析において注目する行	文字	強く発話されている
=	前後の発話が切れ目なく続いている	°文字°	弱く発話されている
<文字>	ゆっくりと発話されている部分	>文字<	速く発話されている部分

るかによって、次の3つの解釈がありうる。1つ目は、3人は大体同じ年齢層であり、3人ともなかなか明るい色の服を着られないという意を表す。2つ目は、Kは自らのことを言っており、自分はもう若くないから、なかなか明るい色の服を着られないと自己卑下している。3つ目は、KはYに視線を向けていることから、Yはもう若くないから、なかなか明るい色の服を着られないという意味である。しかし、3つ目の解釈だと、Y(の年齢)に対するマイナス評価にもなっていないにもかかわらず、08行目は遅延や非流暢性がないという選好される発話の特徴をしていることから、Kは3つ目の意味を伝えようとしていないことが伺える。

08行目に対して、Yは09行目で「そ:だね」と素早く受け入れる。Pomerantz(1984)によれば、自己卑下発話に対する同意の返答は相手への非難・批判に相当するため、自己卑下に対して非同意の返答が優先性の高い返答であるという。09行目には、簡潔であり、遅延なしという選好される返答の特徴があることから、Yは08行目をKの自己卑下として扱っていないことが分かる。以上によって、KとYは08行目を上記の1つ目の解釈、すなわち3人全員を主語として発話を産出・理解していると言える。

この点は11行目のYの発話からも確認できる。09行目を発して0.3秒の間が空いた後、Yはすぐに右手を開き、指先をKのほうに向け、視線もKに向けながら「え?まだ着られるんじゃないの?」と上昇音調でKに確認する。つまり、Yは一旦08行目を3人とも明るい服を着られないというふうに解釈したが、Kを例外として扱い、修復を開始しているように見える。これまでの文脈を考慮に入れると、この発話は単なるKへの質問だけではなく、まだ若いから、あなたは明るい服を着られるというニュアンスを伝えている。つまり、11行目はYが発したKに対する間接的なほめである。続いて、Kは「いやいや」と明示的に11行目を否定する。通常、相手が発した疑問に対しては肯定的な返答が選好的であるが、12行目は否定的な返答であるにもかかわらず、先行発話に少しオーバーラップしており、また、遅延や非流暢性がないという選好される返答の特徴が見られる。このことから、Kは11行目を単なる質問だけではなく、自らへのほめでもあることを理解しており、自画自賛の回避を優先していることが分かる。

続いて、Sは「着られるよ」と音を長く伸ばし、Yに同調しながら、Kに対する間接的なほめを再度行う(13行目)。この時、2節で述べたように、ほめられ側のKはほめを受け入れるかどうかという「ほめられ側のジレンマ」に直面している。しかも、このほめは、11行目に続く2回目のほめである。Kはすでに1回目のほめ(11行目)を否定したため、もう一度ほめを否定すると、ほめ側のPFを脅かす危険性がさらに高くなる。つまり、この時点で、Kはより厳しい課題に直面しており、何かからの対処を取る必要がある。

そこで、KはSのほうに視線を向けながら、「パー子になっちゃう」とはやめに2回繰り返す。ここでの「パー子」とは、派手なピンクの衣装でよく知られる日本のタレント、落語家林家パー子であると考えられる。ほめられたという状況において、Kは「パー子になる」という文字通りの意味ではなく、明るい服を着ると、パー子のように滑稽なことになるから、明るい服は着られないという言外の意味を表そうとしていることが推測される。つまり、Kは冗談の形を借用し、14行目にユーモアを持たせながらほめ返答をしている。

### 3.2 ユーモアの実現

ここで、14行目のほめ返答におけるユーモアはどのように実現されているのかについて考える。普通のほめ返答に比べると、14行目は予想されにくさがある。ここまでの3人の会話では、「パー子」への言及はなされていなかった。つまり、ほめられ側であるKは予告なしに、急に「パー子」に言及してほめ返答を行っているのである。平本(2011)が指摘したように、ユーモアはある概念と事象との間の不一致から生じる「ズレ」により生まれる(平本, 2011:148)。この事例でいうと、「異常さ」のないほめ返答(例えば、「いやいや」「もう着られないよ」のような通常のほめ返答)と14行目のほめ返答の間にある「ズレ」があり、そこからユーモアが醸し出されると言える。また、14行目はどのような意味を表しているのかを理解するために、「パー子」に対する知識が必要となる。そのためKは、YとSは「パー子」に対する必要な知識を持っている、3人の間に「パー子」に対する共通的な認識ができていることを確信した上で、14行目を発したわけである。

このように、ほめられ側であるKは、会話参加者の3人が持っている知識に基づきながら、通常のほめ返答と「ズレ」のある、予想されにくいほめ返答を行うことで、ユーモアを成立させている。

### 3.3 ユーモアのあるほめ返答によって達成された行為

では、このようなユーモアのあるほめ返答はどのような相互行為上の機能を果たしているのか。

3.1.1 節で述べたように、14行目が発される時点で、Kは2度目の「ほめられ側のジレンマ」に直面している。そこ

で、K はほめへの否定の意を直接的に表さずに、「パー子」をリソースとして用い、明るい服を着ると滑稽なことになってしまうため、もう着られない、もう若くないというニュアンスを伝えることで、暗示的にほめへの否定を実現している。また、14行目にユーモアの要素があることは無視できない。Brown & Levinson(1987:229)は、「冗談は、相互の背景知識や価値観に基づいているものであるから、その共通の背景や価値観を強調するために使うことができる」ため、「冗談を言うことは、基本的なポジティブ・ポライトネスの技術である」と指摘している<sup>3</sup>。14行目は、まさにそれにあたる。14行目が産出された直後、ほめ側であるSとYは笑い始め(15,16行目)、「パー子」と繰り返す(16,18行目)。Sacks(1974)によると、冗談の後の笑いや先行発話における具体的な面白みを、笑いを含む口調で繰り返すことは、冗談に対する理解を示すことができる。この事例におけるほめ側であるSとYの反応から、14行目にあるユーモアが理解され、3人の会話が盛り上げられたと言える。

以上によって、14行目のほめ返答は、ほめを受け入れることにつながる自画自賛を回避していると同時に、端的にほめを否定せず、ほめ側のPFにも配慮することが可能になるため、ほめられた後に生じる「ほめられ側のジレンマ」に対処可能であると言える。さらに、ユーモアのあるほめ返答であるから、会話参加者を笑わせたり、会話参加者の連帯感を強化したりすることもできる。

#### 4. おわりに

以上、本稿では、会話分析の手法を用いて、ほめ返答におけるユーモアについて考察した。ユーモアのあるほめ返答とは、会話参加者の共通する知識を利用しながら、通常ほめ返答と「ズレ」のある、予想されにくいものである。このような返答は冗談の形を借用し、暗示的にほめに対する不同意を表すことで、ほめられた後に生じる「ほめられ側のジレンマ」に対処するという相互行為上の機能を持つ。さらに、ほめ返答にあるユーモア性は会話参加者を笑わせたり、会話を盛り上げたりすることができ、ポジティブ・ポライトネスとして機能していることが明らかになった。

ただし、本稿では、1つの事例しか提示しなかった。今後、さらにデータを増やし、今回の分析の妥当性を検証しながら、ほめ返答にあるユーモアについてさらなる考察をしていきたい。

#### 主要参考文献

- Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (田中典子監訳(2011). ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象 研究社)
- 張承姫(2014). 会話参加者の立場から分析する「ほめ」と「ほめの応答」—会話分析手法を用いた日韓ほめの分析— 言語コミュニケーション文化, 11(1), 135-148.
- Jennifer, Hay (2001). The pragmatics of humor support. *Humor*, 14(1), 55-82.
- 串田秀也(2006). 相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化— 世界思想社
- 大津友美(2007). 会話における冗談のコミュニケーション特徴—スタイルシフトによる冗談の場合— 社会言語科学, 10(1) 45-55
- Pomerantz, A. (1978). Compliment responses: Notes on the cooperation of multiple constraints. *Studies in the organization of conversational interaction*. 79-112. New York: Academic Press.
- Pomerantz, Anita. (1984). Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes. In Atkinson, J. Maxwell, & Heritage, John. (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. pp. 57-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- 上野行良(1992). ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について 社会心理学研究, 7(2) 112-120
- Sacks, H. (1974). An Analysis of the Course of a Joke's Telling in Conversation. In J. Sherzer and R. Bauman. (eds.), *Explorations in the Ethnography of Speaking*. pp.337-353. Cambridge: Cambridge University Press.

<sup>3</sup> 日本語訳は田中(2011:170)による。